

要 約

岡 田 彩 希 子

本論文では、夢からの目覚めの体験を一つの構成要素として、精神分析の主体が、双極性を有した特徴的なプロセスのもとに生成することを論じる。

我々の日常生活において主体性の概念は、とりわけ社会的責任との関連においてよく馴染まれた重要なものとなっており、一般的に言って主体とは、思考し認識し行動する能動性のひとつの極であると思念されていると言えるだろう。このような日常的な「主体」という語の用法から、精神分析もまた完全に自由になることはできない。というのは、精神分析も、そうした日常的な「主体」の機能に阻害があれば、それを回復することを目指したり、発達をその方向性に向けて支援することを期待されてきた歴史を有するからである。

しかしながら、「自我」をこのように統一された能動性の極であるべきだと見なしていると、精神分析の中で現れる、双極性を備えたり分裂したりする自我の機能状態を捉えることが難しくなることがあり得る。精神分析による「主体」は、まず、自分自身の身体と調和してはならず、さらには、主語として統一的に働いていると見えるときにも、言表された主体と、言表を行う主体との二相性を呈する。このような背景をふまえつつ、本論文では、精神分析の中で浮かび上がる主体の特性を、一元的ではない生成の過程とその起源の表象に着目して考察する。

序章ではフロイトの患者およびフロイト自身の二つの夢を取り上げて、主要な論点を提示する。どちらも、亡き父親を夢に見てから目覚めており、夢を見ている間に、父親と夢見る人との間の同一化が行われている。主体交替という側面から見てみると、他なるものとの同一化の状態から立ち去る形で、主体が目覚めを実現している。この目覚めの過程では、同一化の主体と目覚めの主体の間で双極構造が形成されているのが認められる。

このように死者が出てきて活動する夢では、夢見る人は夢において、過去に戻りながら死者に同一化し、覚醒において脱同一化することによって、主体として生成する。また、自らを意識するようになった主体は、その自己確認を、夢からの覚醒に当たって反復する。そして自分自身を生きたものとして自覚する主体が、他なるものとの同一化との間で揺曳しつつ生成する。

こうして主体生成は双極構造を示しながら、反復的に生じるのであると考えてみると、発達早期においてこの反復の元になるような現象があるのかどうかを検討してみる必要が生じる。

そこで第一章では、幼児の描画において描く主体とそれを見る側との動的な関係性の中に、すなわちここでは親と子どもとの間で、この主体生成の構造が働いていることを、描画の変化を見ながら把握する。描画過程の変化の中に、主体生成のありさまがどのように象徴化されているかを見てゆくことにする。そこでは、描画の中で主体が親との間で位置変換を行うという現象が観察された。5歳5ヶ月の男児が、母のいるところで描画をしていたとき、「描く」と「搔く」の間で音韻論的なブリッジが発生した。これを介して、主体が、能動的に絵を「描く」ことから受動的に背を支持体であるかのように「搔かれる」ことへ、そしてまた「描く」ことへ戻るといふ、往還運動が起こった。すなわち初めに描いていたときには描画の対象の一つである地球の爆発があり、幼児自身が背を「搔いて」もらうことがあってから再び能動的に自身が「描く」ことに戻

った時には、描画の対象が回復し、生産能力を有した対象が描かれた。

序章で述べた双極構造を振り返りつつこの観察をまとめてみたとき、爆発した地球から生まれるものが、今画を描いている自分自身の存在であるならば、その生まれた場所を見ている者、生まれた様子を知っている者は、「自分はどのように生まれてきたのか」という問いへの答えを有しているはずの者となる。その答えを自身が得るには、「描く」が「搔く」に変換され、さらに「描く」に再変換された後でなくてはならなかった。子どもと親との間の言語的なブリッジが生起したことは、自分自身の身体との関係づけの試みであると解される。幼児は自分自身の身体を直接的には捉えがたく、主体が母親の場へと位置変換して初めてそれが可能になると考えられる。また、その関係が設立されるまでは、初めからまとまった自己身体像を獲得している主体があるのではないこともわかる。それまでは、自己身体は「寸断された」と形容すべき状態を呈しているのである。

幼児の精神活動において、主体生成の際に働く位置変換の運動が捉えられたことをふまえ、この運動の起源がどのように表象され得るのかという問題を第二章において論じる。

ラカンのいう鏡像段階は、寸断された身体という自己知覚と視覚的に先取りされた自己像との間で、弁証法的運動が設立される始原的な時期とされているが、これは精神分析から考察され得る主体生成の過程において重要なファクターであり、神話的な主体生成の語らいの時期にまで及ぶと考えられた。神話では人間の環境や人間自身の起源が語られるが、このような神話では、その表象において寸断された身体の像が頻繁に出現する。この身体像は、精神分析治療の際にも、夢の中に規則的に出現するものであるが、精神分析での知見からそれらの神話を振り返ってみると、身体像が寸断から再生へと至る道のりに、夢から覚めて生成する主体の構造的現れを認めることができる。また、胎内における人間生命を仏具の形態で描き出す江戸時代の「胎内十月図」という実践的説話を併せて考えてみるならば、出産における寸断された神の身体という像や仏具としての身体の変容というこれらの表象は、いままさに夢見、かつ目覚めつつある主体の意識の像を担うものとして顕れることが看取できる。そのような「寸断された身体」は主体の意識以前の空間を占め、主体の意識が成立したときには意識の起源の表象として経験されるだろう。あたかも夢から覚めて夢の中にさまざまな像を残してくる時のように、主体の意識は、神話や説話の中に見出される己の根源としての「寸断された身体」を基盤として、一つの自覚として生成すると考えられる。

この神話的な時期を経たのち意識主体の視覚空間は、主体が双極的な表象の一方の極から自らをもう一つの極として隔てるための、目覚めの構造を呈するようになる。第三章ではその両極の間に生じた干渉が、たとえ悪夢になった場合でも、いわばスクリーン上の「像」を形成し、そこで主体生成が演じられるということを考察した。このような「像」を巡る考察はラカンの自己体験やフロイトの観察、そしてクライン派の分析家の夢報告からも示される。「像」に対して人は、たとえば何かに見入られたような忘我的な意識状態を呈することがある。しかしそれは当の見る側の主体の意識そのものの萌芽であると考えられる。ラカンは、海の上で陽を受けて光る空き缶を見つけたとき、思わずその光に見入ってしまい、自らそのような状態に入ってしまう。そして同乗の人からの、あれはお前を見てはいない、との言葉に我に返ったことがあった。このように、「像」の形成は、荘子の「胡蝶の夢」のような、主体の揺籃の瞬間（どちらが見ているのか）を招くことがある。さらには、その「像」が夢の中で形成され、あたかもその「像」によって夢見る人が見られていると感じられるような目覚めが起こることがある。そこで生じているのはやは

り主体生成、すなわち、意識するものとして自覚する主体の生成の過程であるということが考察される。フロイトの症例である「狼男」において、ひとりで窓が開いて、狼たちがこちらを見つめているという不安夢がある。フロイトはこれを「原場面」を表現するものとしているが、フロイトが「原場面」（フロイトは1歳半頃と推定する）と4歳時のこの夢とをあたかも同時的なものと見なして、「父母を見ていた自分」と「自分を見ている狼」の組み合わせを取り出していることが重要ではないかと考えられる。すなわち、主体は夢からの目覚めの構造を介して、見られるだけの極に固定されることを免れて、見る者の主体性を回復しようとしていたと捉えられるのである。

終章においては、これらの所見を、精神分析による主体性の概念の方向と較べ合わせる。精神分析の主体のありようから考察される主体生成の過程の基本的構造は、目覚めにおいて働く双極構造に規定されており、それは人生早期から続く構造に基礎を持つものであることを考察する。

精神分析における「主体」という用語を振り返っておくと、ラカンではこの用語は積極的に用いられるが、フロイトではむしろ「自我」という用語が中心に来ている。ラカンは、鏡像段階論などにおいて <Je> を術語として使って主体性の発達論的生成を考察したが、多くの場合はむしろ *sujet* という言葉で考えていくことを選んでいる。形容詞的には *sujet* は、何かに服属するというニュアンスを持っているので、フロイトが指摘している自我の能動性と依存性の両面を含むことができるであろう。ラカンが「主体」の二面性を強調したことは、彼がアメリカの「自我心理学」における統一的な自我の概念を批判したこととも繋がっている。

「自我」で表されたり「主体」で表されたりする主体性は、フロイトにおいてもすでにその欲動論を中心として、「双極性」の構造を持つことが捉えられていた。さらにはその晩年にフロイトは、よく知られているように *Ichspaltung*（自我の分裂）という概念を作って、より強く「主体」なるものの一元性に疑問を投げかけている。メラニー・クラインが「良い」「悪い」という形容で、自我や対象世界が子どもにおいて分裂することを明確化したのも、周知のとおりである。また、ワロンが幼児の発達において指摘する「二極性」においては、場面を能動的な相と受動的な相の対比において切り分けながら、子どもは役割的な交替遊びを通じて、自己の内に他者性を見出すとされる。

これらの点を総合すれば、早期に現れる「双極性」の構造は、発達と共に単に乗り越えられてゆくのではなく、後年に至ってもその構造を基盤として主体生成が反復的に行われると捉えるのが適切であると考えられる。とりわけ精神分析においては、夢からの目覚めに際して、その構造が動的に機能し、また起源や誕生をめぐる表象においてもこの機能が働き、このようにして同一化の状態から個的な意識が、自と他を問わず絶えず主体として生成していると思われる。